

令和7年度
福祉体験作文
コンクール
作文集



Y 弥富市社会福祉協議会

ごあいさつ

今年度も、本会主催の福祉体験作文コンクールに、市内各校より多数のご応募をいただき、誠にありがとうございました。

児童・生徒の皆さんのが体験を通して感じたことや、心の動きを素直な言葉で綴った作文を拝見し、大変嬉しく思っております。

福祉体験は、特別なことをする場ではなく、日々の生活の中でふと出会う「相手を思いやる心」に気づき、行動へつなげる機会でもあります。友達との助け合い、地域の方との交流、家族を支える役割など、一つひとつ体験が子どもたちの成長につながっていることを、

令和七年十二月

本コンクールを通じて育まれる優しさや気づきが、これから学校生活や地域での活動において、互いを思いやる力としてさらに広がっていくことを願っています。
最後になりますが、児童・生徒の皆さんを支えてくださった先生方や体験にご協力いただいた地域・事業所・ご家庭の皆様にも、この場をお借りしまして深く感謝申し上げますとともに、今後とも、地域で子どもたちを見守り、共に育てる取り組みに対しまして、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 三浦 義光

今回の作文からも強く感じました。
近年、地域のつながりは以前に比べて変化していますが、だからこそ「声をかける」「手を差しのべる」という思いやりの行動が、今後ますます大切になつてまいります。皆さんの作文には、その小さな一步を踏み出した瞬間が丁寧に表現されており、読む者の心を温かくしてくれました。また、弥富市が大切にしてきた「支え合いの地域づくり」は、子どもたちの世代にも確かに受け継がれています。

令和七年度「福祉体験作文コンクール」作文集

最優秀賞	手を差しのべる勇気をもつて	弥富中学校	二年	黒宮 珠月
優秀賞	能登半島地震のボランティア体験を通して学んだこと	弥富北中学校	一年	白井 まりか
秀逸	出会いの中で気づいたこと	弥富中学校	二年	朝比奈 楷
入選	一人一人を尊重しあおう	栄南小学校	六年	荒尾 優衣
入選	勇気をだしてかける一言	白鳥小学校	五年	篠田 彩未
入選	祖父との向き合い方から学んだこと	弥富北中学校	一年	川田 悠満
佳作	車イスを押してみて	大藤小学校	六年	後藤 那緒
佳作	大切な文字	桜小学校	六年	鹿島 彩羽
佳作	妊婦さんたちのがんばり	栄南小学校	六年	畠中 美南海
佳作	ぼくができること	十四山西部小学校	五年	近藤 匠真

△最優秀賞△

手を差しのべる勇気をもつて

弥富中学校

二年 黒宮 珠月

私は人と接することが苦手で、ボランティア活動を避けていました。そのため、小中学校の実践教室でしか関わったことがなく「どうせ実践する日は来ないだろう」と、それ以上学ぶ気もありませんでした。ですが、その日はあまりにも早くやつきました。

春休み、私は母と二人で好きなゲームのオーケストラを聴きに行きました。その日はいつもより会場が大きく、人数も多かつたので、トイレが混みそうと思つた私は、第一公演が終わつた後、三番のりでトイレにつきました。出るとき、母とすれ違つたのですが、予想以上にトイレが大きかつたので、回転も早いだろうと思い「少しくらいは待つてやろう」と入り口で待ち伏せをしていました。そして突然、その時が来ました。入り口付近で「俺は入れないぞ」「どうしましょ」
「スタッフ呼ぶか?」という風に、言い合つてゐる夫婦らしき二人を見つけました。私は恥ずかしながら、盗み聞きの癖があるので気づきましたが、家族と話していくたり、通りすがつてゐる人たちは、まるで聞いていないようであ(あ、コレ、私がやるしかないな)と思つた瞬間、「手伝いましょうか?」と声をかけていました。私は盗み聞きしていの上に、勝手にトイレに行きたいたのだろうとばかり思つていたので、おどろいた顔

をされた瞬間、正直胃が破裂しそうでした。でも、「お願いします」と言つて頂いたときは、嬉しさと緊張で、心臓が喉から出できそうでした。「では、ココに手を：「と女性の手を私の肘に持つてゆき「ここで右にまがります」「左にまがります」と声をかけました。私の一言一言に「はい」「分かりました」と返事をしてくれるのが何故か嬉しかつたです。ドアまでついたとき(さすがに入るのは違うだろ)と思い「困つたら呼んでください」と声をかけました。ガサガサいいつつも無事出てきたので、私はかけ寄り、手洗い場まで誘導した後も行きと同じよう声をかけ、男性の元まで付き添いました。いつの間にか出てきていた母の、後ろから見守つていてくれたときの何とも言えない顔は、今でも忘れられません。私は「着きました」と声をかけ、手を男性のもとにそつと置きました。「ありがとうございます」と言われたとき、不安が消え、本氣で泣きました「今日は楽しんでください」と二人に言い、人混みで見えなくなるまで二人をながめっていました。何とも言えない顔の母が、肩に手をおいてきたとき、なぜか分からぬけれど、私は泣きました。席についたとき、あの二人が座つてゐるのが見え、私はまた泣きました。怖かつたし、分からぬことだらけで不安だつたけれど、私は一時でもあの人たちに関われたことが嬉しかつたんだろうな、と思いました。

その日は、ドラゴンクエストのオーケストラでした。相手にとつては当たり前だつたかもしれないけれど、

私は初めて誰かの勇者になれた気がしました。

今考えるとよくあのときの私は声をかけてくれたな、と思います。でも、あの日ほど、盗み聞きと、かつこつけ屋と、実践教室に、あつてよかつた：と思つた日

はありません。でも、数人は気づいていたろうに、近頃の人たちは、勇気と経験が足りないと思います。そ

の為にも、福祉実践教室は、もつとたくさん的人が受講し、私のように不安なまま直面しないよう、真剣に受けたほしいと考えました。学ぶだけでなく、考えて予想するまでが、福祉実践教室の全てではないでしょうか。

あの日、手を差しのべたことで、遅ればせながら、大切なことに気づくことができました。

二〇二四年一月一日。その時、私はショッピングモールで家族と買い物をしていました。

楽しんでいたその瞬間、周りの人たちのスマホから緊急地震速報が鳴り響き、お店のシャンデリアが大きな音を立てながら揺れ、今でも鮮明に思い出せるほど

の恐怖を感じました。

皆さんは能登半島地震を覚えていますか？私たちはすぐ家に帰つてテレビを確認しました。テレビでは最大震度七、マグニチュード七・六と放送されていました。その衝撃と同時に、被災された方たちは大丈夫だったのかと心配したこと覚えています。

地震が起きた数か月後、母から「石川県にボランティアに行くけど、興味あつたら一緒に行かない？」と提案されました。私でも何かできることをしたいとう思いから、迷うこともなく「行きたい」と答え、ラーチェーションを使って、私は母と一緒に電車で7時間かけて石川県の輪島市へ行きました。

私が参加した認定NPO法人力タリバのボランティア活動では、災害によつて被災した子どもたちのサポートを行つており、これまでに十一ヶ所で「みんなのこども部屋」を運営して、約四千四百人以上が利用し

〈優秀賞〉

能登半島地震のボランティア体験を通して
学んだこと

弥富北中学校

一年 白井 まりか



たとホームページに書いてありました。また、母は民家の床下の泥出しもしていました。

その中で私が行つたのは「地震で怖い思いをしたり、家や学校、遊び場をなくしたりした子どもたちの居場所づくりをする」というボランティア活動でした。具体的には、子どもが楽しめるテーマで話したり、カーボゲームで一緒に遊んだりすることで、子どもたちが安心して過ごせる居場所を作るという内容でした。

私は子どもたちが地震により環境が大きく変わったことで、心に深い傷を負つていたり、恐怖のあまり人に関われなくなつていたりしないかと考え、内心とても緊張していました。でも、そこに来ていた子たちは、私に元気を与えてくれるような笑顔で話しかけ、自分のことを受け入れてくれました。そこからの二日間、私は自分から積極的に笑顔で話しかけ、子どもたちの心が落ち着くような時間を作ることを心がけました。私は子どもたちと過ごしていくなかで、この場所が地震の影響で居場所を無くしてしまった子どもたちにとって、人と関われる唯一の場所になつていることに気づきました。そして、災害時のボランティアには、泥かきなどだけでなく、そこで暮らしている人たちの心の支えになることも大事な活動であることを学びました。

ボランティア活動が終わつた時、一緒に居場所作りをしていた方から「この二日間、本当に助かつたよ。ありがとうございます！」と言つてもらいました。その言葉を聞いて、私は「自分も輪島の子どもたちのために役に立

てたんだな。ボランティアに参加したことは間違つてなかつた」とホッとしました。

ボランティア活動が終わり、帰る前には輪島の朝市が行われていた場所にも連れて行つてもらいました。そこには地震の影響で、焼失した面積は約四万九千平方メートル、店舗や住宅などの焼損棟数は約二百四十棟にも上つた場所でした。電柱が斜めに倒れていったり、お店が崩れていたりした場所を見て、「去年の今頃はこの場所も賑やかだつたはずなのに……」と思うとともに、少しでも早く復興をして欲しいと強く願いました。

私はボランティア活動に参加した経験を通し、地震の怖さを感じた一方で、たくさん人の支えが被災地にどれほど力を与えてくれたのかを学びました。当時の私は小学生で、ボランティアスタッフとして何ができるかもわかりませんでしたが、そんな自分でも役に立てるボランティアもたくさんあることを学びました。能登半島地震では多くの方々が亡くなりました。その中には自分よりも年下の子どもや、お母さんやお父さんなど家族を亡くしてしまつた子どもたちもいると思います。今でも被災地で誰かの支えになり、活動している人たちに感謝し、私はこれからも自分ができる支援を探していきたいと思います。

〈秀逸〉

出会いの中で気づいたこと

弥富中学校

二年 朝比奈 楷

ある日、私は出かけた先で障がいのある方に出会いました。駅のホームで電車を待つその方は、杖を片手にゆっくりと歩いていました。杖の先が床を打つ度に、

小さな音が響きます。その姿を見ながら私は「大丈夫なのかな、助けた方がいいのかな」と思いつつも、声をかける勇気が出ませんでした。心の中で手を差し伸べたい気持ちとどうすればよいかわからないという思ひが入り混じつていたのです。

やがて電車が到着しました。ドアが開き、人々が乗り込んでいきます。その方も一步ずつ慎重に足を運びました。乗車に時間がかかっていました。そのとき、

「ゆっくりで大丈夫ですよ」

周囲の方々が自然にスペースをあけ、静かに見守つて

気づいたのです。

私は勇気を出してその方に
「席、座りますか？」

と声をかけてみました。相手はにこやかに、「ありがとうございます」と答えてくれました。とても短いやりとりでしたが、その笑顔を前にした瞬間、胸の奥に温かいものが広がっていました。自分がしたことは小さなことに過ぎません。しかし、それが誰かの安心につながったと感じられたとき、私の中には、「障がいのある方と関わることは難しい」という思い込みは消えていました。

この出来事を通して私は、障がいがある方との関わりに対する自分の中の壁に気づきました。障がいそのものが壁なのではなく、どうしたらよいのか分からないうといふ私の心が壁を作っていたのです。もし最初から普通に声をかければいいと考えていたら、もつと自然に行動できたはずです。大切なのは相手を特別視するのではなく、一人の人として向き合う姿勢だと学びました。

さらに考えると、この気づきは障がいのある方との関わりだけでなく、日常のあらゆる人間関係にもつながります。私たちは、自分と違う考え方や背景を持つ人を前にすると、心の中で距離を置いてしまいがちです。しかしその違いを恐れるのではなく、受け入れて理解しようとすれば、新しい学びやつながりが生まれます。この体験はそのことを実感させてくれる大きなきっかけになりました。

社会には、障がいがある方も、さまざま人が共に暮らしています。その中で必要なのは、特に助けることではなく、自然に関わることだと思いま

す。小さな思いやりを積み重ねることが、安心して暮らせる社会を形づくるのだと信じています。

一人一人を尊重しあおう

栄南小学校

六年 荒尾 優衣

駅のホームで出会ったあの日のことは、今でも鮮明に思い出されます。あの一瞬が、私の中にあつた見えない壁を崩し、人と人が支え合う意味を教えてくれました。これから先どんな出会いが待っていても、私は相手を理解しようとする心を忘れずにいたいです。そして、違いを壁ではなく、学びの扉として受け止めることができる人間でありたいと思います。

障がいがある方も、同じ社会の一員です。互いの違いを尊重し合いながら共に生きていくこと。その姿こそが、未来をより良くしていく力になるのではないでしょうか。

あの日の出会いを胸の中に刻みながら、私は一步ずつ成長していきたいと思います。

私が盲ろう者について知ったのは、夏休みにおばあちゃんの家に行き、話を聞いたことがきっかけです。おばあちゃんは、福岡で、盲ろう者の通訳・介助員をしています。そこで、盲ろう者とは、目と耳の両方に障害を持つ人を指すことが分かりました。この二つの感覚が制限されることで、周りの情報を得るのは、とても難しくなると思います。

では、どうやつて周りとコミュニケーションをとっているのか気になり調べてみると、盲ろう者の方たちは、手のひらに文字を書いて伝える「手のひら書き」や、点字、触手話などを使っていることが分かりました。時間がかかるても、難しくても、自分自身で言葉を伝えようとする気持ちが大切だと思いました。話すことや聞くことができなくて、おたがいに理解しあおうとする心があれば、言葉はなくてもつながれると思います。

私はこれまで、障がいがある人を「かわいそう」と思ふことがありました。でも、盲ろう者の方たちのことを調べていくうちに、それはちがうこと気に気づきました。盲ろう者の方たちは、自分ができる方法を見つけて生活したり、周りの人と助け合ったりしながら、強く前向きに生きています。苦しいことや大変なこともたくさんあると思いますが、それでもあきらめずに



がんばつてることに、とても感心しました。このことから、障がいがある人のことをただ、「かわいそう」と思うのではなく、その人の強さや工夫をもつと知つて、おたがいに尊重しあうことが、とても大切だと思いました。

私も困っている人がいたら、気づいて優しく声をかけたり、助けたりしていこうと思います。そして、どんな人も大切な存在だと考え、「みんなちがつてみんないい」というように、ちがいを認めあいながら、共に生きていくれるような社会にしていきたいと思います。たとえ目が見えなくても、耳が聞こえなくても、おたがいに助け合いながら生きていくことで、だれもが安心して暮らせる共生社会をつくることができます。ちがいを理解しあうことが、みんなが笑顔で暮らせる未来の第一歩だと、私は思いました。

勇気をだしてかける一言

白鳥小学校

五年 篠田 彩未

もし目が見えなくなつたら。私ならきっと不安でしかないと思います。

私の学校の福祉実践教室に来てくださつた講師の方の中に視覚障害者がいました。その人は二十二歳の時に病気にかかり目がだんだん見えなくなってきたそ

です。そして現在五十三歳。「今も目の前は真っ暗です」と言つていきました。私だったら絶対怖いな、そう思いました。そして、私の人生は十分幸せだと思いました。今的人生は、家族の顔、友達の顔、きれいな星空、そのすべてが見えているのに、突然病気にかかり、目がみえなくなつてしまつたら。きっと絶望でしかな

いと思います。

でも、不安な視覚障害者の毎日を少しでも明るくしようと作られたユニバーサルデザインがあります。これは、視覚に障害のある人も含め、誰もが使いやすいように、製品や環境をデザインすることです。実際に講師の方が持つていたのが盲人用時計です。ボタンを押すと時間を教えてくれます。なので、視覚障害者でも簡単に時間をることができます。他にも、音響信号機などがあります。信号が青の時は、「カッコー」や「ピヨピヨ」など覚えやすいし、わかりやすい音で教えてくれます。私の住んでいる弥富市にも実際に音響信号機があるのでですが、とても大きな音でなつていてるのでわかりやすかつたです。そして二つとも、音を使って視覚障害者に目の前の様子を表しています。

音を使わずに視覚障害者を案内するのが盲導犬です。盲導犬は人間からの指示を受けて動きます。ですが盲導犬は信号の色がわからないので、私たちが「今青ですかよ」「とまってください」と声をかけることが大切だと思います。私はまだ、町中で盲導犬を連れている人を見たことがありません。もし町中で盲導犬を連れている人がいたら福祉実践教室を受ける前は、声かけは

できなかつたかもしれないです。でも、今なら誰かのためになりたいと思つて声かけができると思ひます。

こんな自信は、福祉実践教室を受ける前にはなかつた一つの強みです。

そして、最後に自分が福祉実践教室を受けてよかつたと思うことが二つあります。一つめは、視覚障害者の普段の気持ちについてよく知れえたことです。その人が不安にならないように手伝えることがないかを自分から探すきっかけになりました。二つめは、人をもつと大切にしようと考えられるようになつたことです。

視覚障害者は声かけをされることで安心できます。そして、誰もが同じ気持ちだと思ひます。視覚障害者でなくとも、不安な時や困ることがあるので、そんな時はやさしく接することを心がけたいと思ひます。「丈夫ですか」とまずは勇気をもつて一言声をかけることが本当に大切だと思いました。

とつて大きな出来事が起こりました。祖父が脳内出血で突然倒れたのです。

病院に入院し、命は助かりましたが、後遺症として「失語症」になりました。失語症とは、言葉を話す、聞く、読む、書くといったことが難しくなる病気です。祖父の場合、特に人の名前や地名などの固有名詞が出てこなくなりました。また、自分が思つていることと違うことを口にしてしまつたり、同じ言葉が何度も出てきたり、逆に全く出てこなしたりします。発音もまひはないのに、たどたどしくなりました。

もともと祖父は、人当たりがよく、優しい性格でした。動物好きで、いっしょに犬の散歩に行つたり、山につれて行つてくれたりと元気な人でした。しかし、病気になつてからは言葉が通じないからか、あまり人に会いたがらなくなり、同時に体調が悪い時は部屋にこもつてしまふこともありました。会話が思うようにいかなくなり、怒りっぽくなつてしましました。

初めて祖父と退院後に会つた時、僕はとてもおどろきました。

僕のことはわかっているようですが、どうにも名前が出てこないようでした。また、こちらから話しかけても、全く会話がかみ合いませんでした。そ

れでも祖父は、一生懸命こちらに話しかけようとしてくれましたが、やつぱり会話は成立しませんでした。心無しか、祖父の顔は悲しそうな表情をしていました。

そこから私は、どうやつて祖父に接していけばいいかを考えるようになりました。まず、話しかける時は、ゆっくりとわかりやすい言葉を使うこと。やさしい漢

祖父との向き合い方から学んだこと

弥富北中学校

一年 川田 悠満

字や絵、図などを書いたり、ジエスチャーや実物を示したりもします。質問は「はい」か「いいえ」で答えられるようにして、言い間違えを笑つたり、何度も言語症は耳が遠いわけではないので、大声で話す必要はありません。さらに、記おく力や判断力は低下していないので、子供扱いをしないことも大切だと感じています。

このような接し方をするうちに、だんだんと祖父との意思疎通が出来るようになりました。今ではまだ、会話はうまく出来ませんが、病気になる前のような、自然体の姿になつてきました。

私は祖父と少し離れた場所に住んでいるため、毎日会うことはできません。それでも、できるだけ時間を見つけて顔を出すようにしたいと思います。祖父が私の姿を見ると「おお：」と短い声を出し、笑ってくれる。そんな祖父の笑顔が僕は好きです。

この経験を通じて、私は福祉とは特別な人だけがすることではなく、身近なことであると気づきました。だれかの生活や心を少しでも良くするために、自分にできることを考え行動すること。それが福祉への第一歩だと思います。そして、それは家族の中에서도できることです。

祖父の失語症は完全に治る病気ではありません。それでも、祖父が少しでもおだやかに、安心して毎日を過ごせるように、僕にできることは続けていきたいです。将来もし僕が別の形で福祉に関わることがあつて

も、この祖父との経験は必ず役に立つと思います。福祉とは、「相手の立場に立つて考へること」だと、祖父が教えてくれました。これからも、祖父と接していく中で、福祉に対する新たな発見があると思いますが、そのたびに僕に出来る事を一つずつ実践していく、たましいなと思います。これからもその気持ちを忘れずに、身近な人を大切にしていきたいです。

車イスを押してみて

大藤小学校

六年 後藤 那緒

私の祖父は、外出する時だけ、車イスを利用しています。先日、期日前投票で市役所に行つた時、スロープを利用して気付いた事が2つあります。

1つ目は、スロープの角度についてです。その市役所のスロープは、特に他の場所のスロープと見た目は変わらなかつたけれど、実際に押してみると、とても急だと感じました。少し手をはなしただけでも、車イスが下がつてしまい、私とぶつかりそうになるからです。しかも、なかなか前に進まず、とても困りました。祖父も「苦しいなあ。」と言つていて、もつとスマーズに押してあげたいと思いました。だから、私は自分の身体を車イスにもつと近づけて、下から押し上げるように力を入れて車イスを押すことにしました。

そうすると、少しばかずには進むようになつたけれど、私はとても大変で、つかれました。

投票後、下る時は上の時よりも、もつと大変でした。

それは、私が押していなくても、勝手に進んでいってしまう。私が安心して乗つていられるように押してあげたいけれど、どうしていいかわからず、困りました。すると、祖父が、バックで押すといい事を教えてくれました。実際にやつてみると、自分がストップバーの役割をしていることになり、スピードが調整でき、祖父も私も安心して下る事ができました。スロープの角度が急だと押す人だけではなく、乗つている人の負担にもなるということがわかりました。

もう1つは、期日前投票の案内板の設置場所についてです。案内板は、スロープと通路の境目に置いてありました。私が利用したスロープではなかったので、直接、通れないなど、困ったわけではありません。でも、もし、私がそこを通らなければいけないのであれば、案内板により、道はばがせまくなり、通りにくくて困ります。案内板も必要ですが、スロープの道はばも確保しておいてほしいです。

スロープは、車イスの人だけでなく、ベビーカーやシルバーカーなどを使用している人や、階段の上り下りがつらい人などが利用します。だれもが『困らない社会をつくりたい』という思いを持ち続け、負担なく暮らせる社会をつくり、過ごしていきたいです。

大切な文字

桜小学校

六年 鹿島 彩羽

わたしは以前、福祉実践教室で点字について学びました。点字は、視覚に障がいのある方が触って読む文字です。盛り上がった6つの点の組み合わせで表現され、左から右へ横に読んでいきます。福祉実践教室では、点字器を使つた点字の打ち方を学ぶことができました。点字器は、プラスチックのプレートに小さな四角い穴があいて並んでいて点筆で用紙にうつていきます。点字を打つてみると、打ち間違えたり、力を入れすぎて紙が破れてしまったり、点字を打つのはとても難しかったです。数字やアルファベットを打つ時は、数符や外字符という決められた記号を使うなど、細かな決まりがあることにおどろきました。また、一番わたくしが大変だと思った事は、点字は、点が盛り上がつた凸面を左から右に触れて読みます。でも、打つ時は、反対に凹面（裏）から、右から左へと点を打ちます。という事は、打つ時は、点字も左右を逆にして打たなければなりません。それに、点字で文を打つ時は意味のまとまりごとに一マスあけて打ちます。そして、点字では、話すように「うは」「うへ」「は」「うわ」「うえ」と打ちますし、「う段」の音がのびる時は、のばす記号を使うので、「きょうは」は「きょーわ」になります。

こんなにも様々な事に気をつけながらの作業は、わたくしにとって想像もつかない、大変の練習や努力が必要

要だと思いました。

わたしは、点字がどのようにはじまつたのか、気になり、少し調べてみました。点字はフランスが発祥の地でした。もともと、軍人用として使っていたものを1825年、パリ訓盲院の教師だったルイ・ブライユが視覚障がい者用の文字として改良し、現在の6点点字を考案しました。この点字は1854年フランスで正式に採用され、現在では、世界中で使われるようになります。わたしは、点字が使われているひらがなを全部書けるようになつていていました。

わたしの身のまわりにある点字を探してみると、炊飯器・トイレのパネルに点字がありました。飲食物では、お酒、ゆかり、ケチャップ、ジャムがありました。他にエレベーターのボタン、切つぶ販売機、点字ブロッタクに点字があることは知っていました。わたしは点字を解つても、指先に感じるだけで本当に読むのは難しいと思いました。

そして今年の国語の授業で、「ユニバーサルデザインの絵本『ねえおそらのあれなあに?』」という絵本を知りました。視覚に障がいがある方々も、星のみ力が伝わる様に、星の明るさは、点の大きさで表わしたり、絵本の上にアクリル板でデコボコさせていて、とてもステキで感動しました。

点字は、見えない、見えにくい人にとって大切な文字です。もつともつと誰もが楽しめる世界になるといなと思いました。

私は、自分のお母さんが二年前に妊娠していたときの話を聞く機会がありました。私には、九才はなれた妹がいます。そのときのお母さんの妊娠生活について話します。

当時私は小学校三年生でした。とつぜんお母さんから話があると聞いてなんだろうと思つていたら「赤ちゃんができるよ。」と言われました。私はとつぜん言われてとてもびっくりしました。けれどこれからおかさんが大変になるから、たくさんお手伝いしないとなと思つてたくさん手伝いました。

数日がたち、お母さんはあまり体調がよくありませんでした。お母さんは「切迫早産」になつてしまつて、安静を先生に伝えられたそうです。お母さんは、入院してしまつたので、妹と弟のお世話をしました。そして、お母さんが妹を産んでくれました。お母さんは赤ちゃんを産めたけど、他の人はたまに流産してしまう人もいるそうです。お母さんは「本当に書いてあることとちがうことが多い。」と言っていました。妊婦さんはみんな人それぞれで、元気に産まれてくる子もいれば、少しあぶない状態で産まれてくる子もいることがわかりました。

私は、妊婦さんの大変さをお母さんから教えてもらいました。自分でも大変なことは知つていいけど、具

妊婦さんたちのがんばり

栄南小学校

六年 畑中 美南海

体的に知れて妊婦さんのつらさをすこしでも理解してあげたらしいなと思いました。この経験から、妊婦さんが困つていたら、積極的に声をかけて手助けをしてあげたいです。この作文を読んでくれた人が少しでも妊婦さんへの心がけをしてくれたらなと思います。

ぼくができること

十四山西部小学校

五年 近藤 匠真

ぼくは、高れい者ぎじ体験を通して、くわしく考えてみたいたいと思いました。高れい者ぎじ体験では、手が力サカサになることや、目が見えにくくなること、耳が聞こえにくくなることを行いました。ぼくは、いつもすごしている日常生活とことなり、いつも当たり前に出来ないということがとてもびっくりしました。高齢者に手助けが一番重要ということが分かりました。だから、一人一人がかいごの意識を持つことが大事だと思います。

しかし、実際ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは、毎日とつても元気に過ごしています。例えば、おばあちゃんは、毎日家の外の畑で野菜を育ていつもおいしい野菜をぼくたちにくれたりします。おじいちゃんは、ゴルフが大好きで毎日庭でゴルフの練習をしていきます。二人はいつも笑顔で楽しく過ごしています。だ

から「お年より」「かいご」と聞いても、ピンときません。でも名古屋に住んでいる大きいおばあちゃんに会つた時に、そのおばあちゃんは足が弱つていて、つづをついて歩いていて、少し移動するだけでとても大変そうでした。また、その大きいおばあちゃんは、かたいものが食べられなくて、ぼくのおばあちゃんがやらかくにたものしか食べることができなくて、何を食べさせたらいのかおばあちゃんはなやんでいました。今は元気にすごしているおじいちゃんおばあちゃんが、もし体が自由に動かすことができなくなつたら、ぼくに出来る事を手助けしたいです。例えば、どこかへ行くときは、かいだんやだんさにつまずいて、けがをしてしまうかもしれないの、手をつないで歩いたり、体がいたいといつてたら、マッサージをしてあげたり、いっしょに楽しく話をしてあげたいです。おじいちゃんおばあちゃんは、ぼくが小さいころから、いつも公園につれてつれたりいっぱいやさしくしてくれました。おじいちゃんおばあちゃんはぼくたちのために色々してくれてとっても感じやしています。だからこれからは、その感しやをわすれずに、おじいちゃんおばあちゃんの支えになつてあげる番だと思います。



～社会福祉法人弥富市社会福祉協議会～

＜主な事業内容＞

- 弁護士による法律相談、司法書士による相続・登記相談、民生委員・人権擁護委員等による心配ごと相談
- 結婚相談及び関連事業の企画立案
- 車椅子等貸出事業
- 生活福祉資金や小口資金の貸付
- 福祉出前講座の実施、福祉貢献活動の支援
- ボランティアセンター事業（ボランティア活動の相談、ボランティア情報の提供、ボランティア活動保険の加入受付、青少年ボランティア体験学習事業の実施等）
- 各種団体の支援協力（福寿会連合会、遺族会、子ども会、身体障害者福祉会、ひまわり会、ボランティア連絡協議会等）
- 80歳以上の方に敬老記念品の贈呈
- 結婚50周年を祝う『金婚式』の開催
- 戦没者を偲ぶ『戦没者追悼式』の開催
- 共同募金配分金事業
 - ・ひとり暮らし高齢者等見守り活動の実施
 - ・障がい者対象「やとみふくしバス旅行」の実施
 - ・障がい児、ひとり親家庭対象「夏休み企画」の実施
 - ・市内学校で「福祉実践教室」の開催
 - ・ボランティア活動育成
 - ・大規模災害時の災害ボランティアセンターの運営
 - ・歳末たすけあい募金事業「福祉映画会（講演会）、表彰式」の開催
- なでしこ指定居宅介護支援事業所の運営（ケアプラン作成等）
- なでしこ指定訪問介護事業所の運営（高齢者、障がい者宅にホームヘルパー派遣）
- なでしこ指定障害者相談支援事業所の運営（障がい児・者の相談、サービス利用計画作成等）
- 『生活自立支援センター』の運営（生活困窮者自立支援事業）
- 日常生活自立支援事業の実施（軽度認知症、知的障がい者等の金銭管理等）
- 『チャレンジハウス弥富』（就労継続支援B型）経営
- 『地域活動支援センター十四山』（障がい者通所作業所）経営

弥富市社会福祉協議会基本理念

“や”やさしさにあふれ
“と”ともに生き
“み”みんなでつくる魅力あるまちの
“ふ”ふだんの
“ぐ”くらしの
“し”しあわせ



©しゃらんちゃん

【お問合せ】社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

- 〒 498-0021 愛知県弥富市鯉浦町上本田 95 番地 1 E-mail : yatomi-shakyo@clovernet.ne.jp
法 人 運 営 部 門 Tel0567-65-8105 地 域 福 祉 活 動 推 進 部 門 Tel0567-65-8105
共 同 募 金 委 員 会 Tel0567-65-8105 ボ ラ ン テ ィ ア セ セ ン タ ー Tel0567-65-8105
なでしこ指定訪問介護事業所 Tel0567-65-8106 なでしこ指定居宅介護支援事業所 Tel0567-65-8001
生活自立支援センター Tel0567-65-8105 なでしこ指定障害者相談支援事業所 Tel0567-65-3724
チャレンジハウス弥富 Tel0567-65-8008
- 〒 490-1413 愛知県弥富市子宝六丁目 80 番地 E-mail : yatomi-shakyo-j@dune.ocn.ne.jp
地 域 活 動 支 援 セ セ ン タ ー 十 四 山 Tel0567-52-3425 FAX0567-52-3811

